寿でくらす人々あれこれ　５８

寿地区とはどんな町（街）

　社会では、通称「寿ドヤ街」、あるいは単に「ドヤ街」といわれています。

この40数年で日雇労働者の町から、高齢者、病者、障がい者が多く住む街へと変わってきました。変わらないのは、寿地区が「移動人口」で維持されていることでしょう。人間が移動する背景は、社会情勢・時代にあるでしょうか。人間は時の流れ、時代の推移には逆らえないとよくいわれます。もっとも時代は人間の働きかけが作用しています。

多くの人は、僕もですが、時代の影響は受けますが時代を変える力は持ち合わせていないようです。時代に翻弄されるというか、時代に抗うというか、まあ、無駄な抵抗はしていますが。

全国民が衣食住で困窮の極みだった敗戦後の1950年代、米軍軍貨と穀物荷揚げの集中する横浜港には全国から仕事と食事を求めて多くの労働者が集まってきました。また昭和25年からの朝鮮戦争特需による港湾労働の拡大は、全国から労働者の集中を招いて一層住宅難を現出させました。野宿、バラック、スラム地域の拡大、艀船を改造した水上ホテルなどが増えました。1960年代は、高度経済成長策が実施され、石炭から石油へのエネルギー転換で全国の炭鉱が閉山を余議なくされ、多くの炭鉱労働者が離職しました。

また、農家の多くの働き手と若者たちは、都市と農村の格差と農業施策（農業基本法）に将来の希望を見出せず農業を捨て都市へと向かいました。

60年代の農村から都市圏への人口移動は、300万から500万といわれ日本全国の人が都市に向かって流れ、流された特異な時代です。後年、「雪崩をうった人口移動」と表現されたように、10年間という短期間のあいだにこれだけの移動があったのは世界史上日本だけと言われる現象です。そんなわけで、寿ドヤ街だけが移動人口というわけではなく、日本中の人たちが流されて生活が根こそぎ変わった時代といえるのです。この高度経済成長策は、都市の過密、地方の過疎、公害の激化のもとがまかれたときでした。こんな時代の背景の中で戦前、ミナト横浜の代表的な下町だった松影、寿、扇町の現寿ドヤ街は、敗戦直後米軍に接収され、昭和28年から30年にかけその接収が解除された後の昭和31年にドヤの第1号が開業。昭和40年には81軒のドヤが集中する「街」になりました。日本の経済成長と共に形成された人為的な町といわれる由縁です。

寿地区は移動人口で維持されてきた町ですが、先述のように日本の都市の多くがそうでした。当時、京浜工業地帯の中心地であった川崎市の人口は6割以上が新住民でした。

新住民と言えば、横浜もそうでした。安政6年の開港以前、横浜は、市歌にあるように、「昔思えば苫屋の煙り、ちらりほらりと建てりし処、」と表現される静かな寒村でした。横浜もまた新しい住民を受け入れて開港後今日まで発展し続けた街です。新しい住民というのは凄いエネルギーの源になるのですね。

寿ドヤ街は日雇労働市場として、港の仕事、道路、橋、ビル、下水道など急激に膨張する都市の近代化を身体で支えてきました。肉体労働は重労働で危険といつも隣り合わせの仕事です。仕事が終わったあと身体の疲れやほてり、緊張感と身体のこわばりは何かをしないでは解消できません。気分転換が必須です。今風にいえば、クールダウンが必要です。バクチや喧嘩、酒は身近で必須なクールダウンの方法でした。これらは相手が必要です。にぎやかに晴れやかに派手に。生きがいでもあったのではないでしょうか。

職人がいました。鳶職の手甲脚絆できりっとしたなりは、気持ちのよいものでした。又聞きした話ですが、現場に向かう途中気に入らないこと、気持の乱れることに遭遇するとさっと身をひるがえして帰ってしまうと聞きました。乱れた気持ちのまヽでは高所作業は危険ということらしい。鳶職だけでなく、港湾労働者や土工の方からも共通する話を聞きました。港湾、土木建築の作業はチーム労働です。双方の、また皆の気が合わないと事故や怪我に直結するからでしょう。

職人たちは、気難しくまた誇り高い人たちです。でも、現場では気を合わせないと仲間を道ずれにした事故に直結します。重労働に加えいろんな緊張や気づかいに疲れた身体を明日に向けてどう整えるか…。日常の気難しくわがままに見えることは、危険な仕事とクールダウンの繰り返しを思えば、その人柄や気性に親近感を感じます。

もうひとつ、寿の特徴は単身者の町であるということです。移動してきた背景は個人々々違うでしょう。単身になって寿で暮らすようになったプロセスはいろいろだと思います。高齢者、障がい者（労災によって、被爆者手帳を所持している方、電車の事故に遭遇し両下肢を切断した方、中途失明の方など…。）アルコール・薬物・ギャンブル等依存症の方も非常に多くいます。また、人間関係が苦手な方。内科、外科、精神等あらゆる疾病と重複障害の方…。現代の至上の価値とされる？生産性という観点から見ると低い方々です。

外見もぱっとせず清くも美しくもなく、褒められることも感心されることもなく、注目もされず誰の記憶にも残らず、死する時も知る人も手を合わせる者もいません。

周囲からは解釈される一方で、自分たちの思いや解釈はほとんど無視されます。世の偏見と誤解に耐え、無名で存在し無名で消えていきます。そんな寿の中で、なぜ一人ひとりの存在感が際立つのだろう。不思議です。寿を歩いて時にふっと感じること、10メートル歩いてすら、すれ違い佇む人にその人の人生を思わせられるときがあります。厳しい顔でじっと佇む人、不自由な身体に優しい笑顔と雰囲気をたたえている人、飲んで棒きれのように身体を路上に横たえている人。こんな表情や姿を無防備にさらせる場は寿以外にあるでしょうか。それを空気のように受け入れやり過ごす場は寿以外にあるでしょうか。いま以上に良くなりようがない姿で在ることができる場があるでしょうか。

どんなひどい状況にあっても自分より酷い状況の人がいると思える場は他にあるでしょうか。寿が住み暮らし易いとはいえないが、世間のどんな所でも住み暮らせないが寿なら住み暮らせるという人が確かにいる、と僕は思っています。僕は、寿で暮らす人々とそうでない人との違いはないと思っています。たいした理由ではなく、人間ってそう大した違いはないだろうと思っているだけなのですが。ドヤの部屋には，身一つ以外のものはほとんどないことでしょう。寿に割合見られるタイプは肉体労働で生きてきたと思わせる日焼けした穏やかな優しい顔立の人で、農耕民族のＤＮＡが息づいているように見えます。縄文・弥生から長く続いた農耕と農業文化は、江戸時代にその基礎である「土」が最も肥えた時代を迎えたといいます。戦後の高度経済成長政策の中で、農業は大きく姿を変えました。都市への労働力創出の場となり、農業の生産性を上げるため機械化、工業肥料と農薬が導入されました。10,000年以上にわたって続いてきた農耕ＤＮＡが断たれたのです。都市生活に適応し順応するというのは、人間にとって実は大変困難なことなのではないかと改めて思います。

3.11．東日本大震災がありました。犠牲となった多くの方々や被災された多くの方々に心からの哀悼とお見舞いを申し上げます。復興の兆しが見え救援の手も世界から差しのべられています。義援金を寄せている方も沢山いらっしゃいます。個人で100億円も寄付する方も。なぜこんな途方もないお金が個人にあるのだろう！？　僕の生活実感はまったくおいつかない世界です。お金より気持ちだいと100円を寄せる茶髪の若者も。

「義援金を盗る人」のことも報道されました。僕は、今の状況を思うとその人のことがとても気がかりです。いつか、寿でお会いすることができたらいいな、などと空想したりしてしまいました。

僕にとっての寿は、どんな人間も住み暮らせる雰囲気と潤いが隠れてある「街」だと思っています。いつかその潤いが奪われてしまう事態も考えられます。その大きな背景はきっと「正義」の名においてであろうと危惧しています。

単身者は、今日一日がすべてです。分かち合い未来を託す人はいません。握っても手のあいだからこぼれおちる砂のように手ごたえがない孤独でしょうか。寿のそれはまた、一人ひとりの存在感の代償なのでしょうか。勿論孤独は寿だけではありませんが。

僕は寿が好きです。寿に住み暮らす人が好きです。無名の方々です。自分にわがままな方々です。人間関係が苦手で生き方が下手なようです。それだけに喜怒哀楽は率直で、僕にはない、できない人間の生き方を見せてくれます。それは、僕の大きな力のもとになっています。

僕は、寿と寿で暮らす人に何か出来ることがあると意気込んで寿に来ました。出来たこともありました。勿論、寿福祉センターという場があって、多くの方々との出会いがあってのことです。でも、それ以上に、寿と寿で暮らす方々に生かされて現在があると思っています。僕は、寿に来て人間が好きになりました。よくならなくとも、こうしたいと思ってもなかなかできなくとも、寿で生きている方々と接しているとなぜか生きる元気をもらえるのです。

次回は、また考えます。